

# イリムスクからモスクワへの旅 ——流刑人ラジーシチェフの帰還日記——

白倉 克文  
基礎教育課程

A Journey from Ilimsk to Moscow  
—On the Journal Kept by Radishchev, an Exile, on his Return home—

SHIRAKURA Katsufumi

*Division of Liberal Arts and Science*

(Received November 5, 2010 ; Accepted January 13, 2011)

## 1

### (1)

1796年11月にエカチェリーナ二世が急死し、長男パーヴェルが同月6日に即位した。新帝は同月23日にラジーシチェフのシベリアからの帰還を許可する勅書に著名した<sup>1)</sup>。ラジーシチェフの息子パーヴェルは父の帰還決定の経緯について、次のように記している。「ヴォロンツォーフ伯爵の依頼で、当時の有力者アレクサンドル・アンドレヴィチ・ベズポロトコ公爵がラジーシチェフの帰還を請願した。即位後三日目にパーヴェル一世はノヴィコフの解放とラジーシチェフのシベリアからの帰還を命令した。」<sup>2)</sup> 翌1797年1月24日にラジーシチェフは流刑地イリムスクからイルクーツクに出向き、帰国許可の決定を県知事L・T・ナゲリから正式に伝えられた。翌々日のヴォロンツォーフ伯爵宛の手紙には、「自分の村に住むためにロシアに帰ります」(491)<sup>3)</sup>と嬉しげに記されている。イルクーツクでは長旅に耐えうる櫓を入手し、イリムスクに戻った。こうして帰還の旅の準備が整っていった。

一行は2月20日にイリムスクを出立し、モスクワに7月11日に到着した。厳寒期から夏にかけての半年に近い長旅であった。これより5年前の1791年に日本人漂流者大黒屋光太夫は、ラックスマンと共に1月15日にイルクーツクを立ち、ほぼ1ヶ月の櫓旅行でモスクワに到着している。それと比較してはるかな長旅であった。長旅の理由の一つは構成メンバーにあったと思われる。同行家族は先妻アンナとの間の子供エカチェリーナとパーヴェル、先妻の妹で後妻となったエリザヴェータ、及び彼女との間に生まれた三人の子供アンナ、フェクラ、アフナーシの6人であり、末子はまだ半歳にも達せぬ乳児であった。他に数名の使用人も含まれていた。

帰還時のラジーシチェフは依然として流刑人の立場に置かれていた。領地ネムツォヴォでの定住こそ許可されたが、完全な自由が保障されたわけではなかった。流刑執行後10年が経過した1800年12月21日にパーヴェル一世に自由の回復を訴願したが<sup>4)</sup>、叶えられず、結局完全な名誉回復がなされたのは、アレクサンドル一世即位の1801年になってであった。したがって帰還の時の彼の身分は流刑人としてのそれであり、後の手紙からも明らかのように<sup>5)</sup>、一行の行程は予め定められたもので、監視の下にあった。

帰還旅行中にラジーシチェフは日記を書き続けたが、それは往路日記と比べてはるかに詳細であり、分量もほぼ3倍に達している<sup>6)</sup>。二つの旅日記の最大の特徴は、緻密な観察に基づく客観的な記述にある。客観性を重視する彼の姿勢は、イリムスクで書いた次の手紙文に最も見事に表現されている。科学者ヨハン・ゲオルギを高く評価しつつ、次のように記しているのである。「彼は不消化な判断は避け、全身を耳目と化した人間として、事物について語っています。」(434) 正確で詳細な情報収集を「全身を耳目と化した人間」として実践すること、これがラジーシチェフの基本姿勢であり、それは殊に帰還日記に顕著に貫かれている。それ故この日記からは往時のシベリア奥地の日常生活が立ち現われてくるし、カマ川やヴォルガ川で働く人々の吐息さえも伝わってくる。その意味でそれはシベリア社会史の貴重な資料となりえている。一方で、それは彼自身の人物像を明らかにする最高の資料でもある。旅人としての彼は自然科学者であると同時に社会学者であり、自然賛美者であると同時に空想豊かな作家であった。いわば「百科全書家」としての彼の人間像がここで十全に発揮されているのである。それだけではない。この日記には彼のもう一つの重要な

側面が表現されている。それは優れた行政者としての資質である。逮捕直前まで彼は税関の責任者として活躍していたし、復権後には法典編纂委員として活動し、独自の立法案を作成している。長らく行政官として勤務した彼は、行政者としての発想を保持し続けたのであり、この姿勢がこの日記からも鮮明に見てとれる。

ウラル山脈西方の都市ペルミを境に、旅は前半の陸路と後半の航路に二分される。さらに陸路はトボリスクを境に橈行と駅通馬車行に二分され、航路はカザンを境にカマ川下りとヴォルガ川遡航とに二分される。船旅はニジニ・ノヴゴロドで終わり、そこからモスクワまでは再び陸路である。以上が旅の概略であるが、幸いなことに全旅程の同行者であった息子パーヴェルが貴重な回想記を残しており、それは父の帰還日記の貴重な補助資料として役立つ。当時彼は13歳ほどの少年であり、その記述は十分信頼に値する。二つの資料を頼りに、ラジーシチェフの帰還旅行の追体験を試みたい。

## (2)

シベリアの橈行とはどのようなものだったのだろうか。当時の橈について大黒屋光太夫は次のように記している。「橈は殊の外はやきものにて、日に行事百余里なり。旅人は橈の上にキビツカといふものをのせ、それに乗て行事なり。」<sup>7)</sup> ラジーシチェフの一行もキビツカ付きの大型橈を、複数台使用したものと思われる。寒さについて彼はほとんど記していないが、危険な厳寒期の旅であったはずである。日本人旅行者玉井喜作は約一世紀後の冬季に商隊でシベリアを横断したが、彼は気温は零下50度に達したと伝えている<sup>8)</sup>。そうした過酷な状況下にあいながら、ラジーシチェフは文字通り「全身を耳目と化した人間」として情報を収集し続けた。通過地の地名や走行距離、各地の物価や賃金、そして納税額さえも、事細かに示している。特に地名と区間距離の記載は徹底している。例えば出立して2日後のブラーツク周辺は次のように記されている。2月22日付。「夜明けにカイモノフを出発し、午後2時マムイリエに到着、33ヴェルスタ。……マムイリエで昼食後、ケジマ・アンガラまで20ヴェルスタ。ケジマ・アンガラからフィリポフ島まで22ヴェルスタ。ブラーツク砦まで22ヴェルスタ。ブラーツク砦はオカ川がアンガラ川に流入する地にある。」(268) 玉井は、シベリアには道路上に道標があり、それを利用することで距離の測定は容易であったと伝えているが<sup>9)</sup>、ラジーシチェフにもこの道標が役立ったのだろうか。『シベリアのラジーシチェフ』の著者タタリンツェフは、道標以外の情報源として、御者や地元民、駅長や護衛を想定しているが<sup>10)</sup>、いずれにしてもラジーシチェフは己の目と耳を存分に活用したに違いない、こうした綿密な記述は

航行中を含めて、全行程で続けられる。そこで次に、特に興味深い記述に注目しつつ、一行の旅路を順次辿ってみよう。

シベリア奥地の記述には、当時一般に使用されていた運送路である連水陸路(ВОЛЮК)が登場する。河川と河川を連結する連水陸路について、2月24日に次のように記されている。「ここで馬を替え、連水陸路、と言うよりは森を行く。……イリルからブルフンまでは連水陸路45ヴェルスタ。」(269) この日まで日記は毎日欠かさず記されてきたが、この日初めて途絶えている。玉井喜作がそうであったように、日記は宿所で書いたのであろうが、連水陸路では終日終夜の走行を余儀なくされて、その余裕さえなかったのだろう。

シベリア奥地の往時の生活ぶりを髣髴させる記述も多い。3月9日には湖での漁について記されているが、魚の名称が事細かく記録されている。「ウビンスク湖とカルガトではカワカマス(カマス)の収穫が一番多く、フナ、アイト、テンチ、パーチも獲れる。これらの魚はすべて特大である。」(277) 同じ日には食料品の値段についても記されている。「ウバでは我々は大型丸パンに10カペイカ取られたが、ライ麦粉1ブードは25カペイカで売られている。一方カラス麦は35から40カペイカ。去年はカラス麦と穀粉はほとんどどこでも1ルーブル20カペイカだった。」(278) このように過去と比較しての記述が頻出しており、注意を引く。翌10日には再び漁業に関する記述があり、ここでは魚の値段が次のように記されている。「この湖では冬の初めから魚を採り、荷馬車50台分のカワカマスとフナを捕獲し、ブードあたり10カペイカで販売した。」(279) それでは一体連綿と続くこのような詳細な記述の意図は何であったのだろうか。この点についてタタリンツェフは執筆意図を往路日記と帰還日記に分けて考察し、前者は『中国貿易に関する書簡』を執筆するための資料作りであり、後者はそこで主張した自説を検証する目的があった、と想定している<sup>11)</sup>。徹底した情報収集とその記載は、爾後の創作活動への備忘録的な意味を持ったのであろう。それと同時にそれは行政官として長年にわたって身に付けた習慣的な行為であったのかもしれない。

3月28日には再び連水陸路に関する記述が見出される。「ここでズジロフスク連水陸路が始まる。全くの沼沢地。イズブシクまで24ヴェルスタ、アチモヴァヤまで29ヴェルスタ。かくて53ヴェルスタの連水陸路、すなわちアフの頂よりバルスク川まで。」(282) この連水陸路については往路にも記述があり<sup>12)</sup>、この運送手段にラジーシチェフは強い関心を寄せていたようである。

トボリスクには4月1日の夜明けに到着したが、それまでに二つの重要な出会いがあった。一つは、『ペテル

ブルグからモスクワへの旅』の登場人物を想起させる奇特な老人との再会である。カインスクとタラとの間のアルトィクで3月13日に次のように記述している。「アルトィクには極めて有徳なブリノフ老人が住む。1795年にバラブでパンが1ルーブルから1ルーブル20カペイカで売られていた時、彼は貧民に50カペイカで売り、700ブード以上を売った。」(280) 実はこの人物とは往路でも出会っており、1792年8月9日の日記に次のように描かれている。「アルトィク村では農民ブリノフ家に滞在する。己の境遇を神に感謝しつつ、彼は思いを込め感泣しつつ、3年前の凶作で民衆が被った不幸について語った。パンが1ブード70カペイカで販売されていた時、彼は15カペイカで売り、多くの人々には無償で与えた。」(261) このような奇特な人物との遭遇にも論評は挟まず、淡々とした表現に終始している。

もう一つの出会いは日本への渡航体験を持つ人物との遭遇である。ブリノフ老人との会見直後、妻の発病でタラで長期滞在を余儀なくされたが、そこで次の事実が書き留められている。「22日。イルクーツクに向かう陸軍中尉ロフツォーフの訪問。彼は日本に行ったことがある。」(281) 『北槎聞略』には、光太夫の一行を日本に送還したエカチェリーナ号の乗組員として、船司ヴァシーリー・ロフツォーフとその養子アレクセイ・ロフツォーフの名前が記されているが、ラジーシチェフは両者のいずれかと面会したものと考えられる。因みに日本人に関して彼は流刑中に別の個所でも記している。1791年11月5日イルクーツクでの記述である。「もし冬道が1週間遅ければ、中国人と会える機会が持てるだろうから、私には好都合です。しかしその人々との別離が私の真の悲しみの源となっている人々と会える幸せが許されるならば、中国人や日本人との会見は喜んで辞退します。」(398-399) 彼のイルクーツク滞在は1791年9月から12月20日であり、それはちょうど大黒屋光太夫のペテルブルグ行きと重なっていた。光太夫のイルクーツク滞在は1789年2月17日から1791年1月15日までと、1792年1月23日以降であった。両者は1月の時間差で会見ができなかったことになる。

トボリスクでは妻の死亡と埋葬のために3週間ほどの滞在を余儀なくされた。季節はすでに春に移っており、ここからの走行は橇ではなく、息子パーヴェルが「トボリスクからは馬車で出発した」<sup>13)</sup> と記すように、駅馬車であった。それは橇行以上の困難を伴う旅だった。「トボリスクを4月22日夜11時に出発。御者はやむを得ず出かける。イルトゥシ川とトボル川沿いに極めて悪路の冬道を進む。…すでに23日に御者は走行を嫌がる。知事に手紙を書く。」(283)。チュメニに27日の夜明けに到着。「チュメニに夜明けに到着。我々は成婚を祝う部屋

に通された。」(284) チュメニからはウラル越えが始まった。後述するようにこの行程でラジーシチェフの最大の関心は鉱物に向けられたが、この地の農業に関して貴重な観察記録を残している。次はウラル越えを終えたペルミでの記述である。「チュメニまではまだ所々に雪を見たが、チュメニを過ぎると雪はなく、黄ばんだ草がある。カムィシロフ付近は約100ヴェルスタ、四方に秋蒔き作物が緑になっている。春蒔き作物の土地は秋に耕され、種が播かれ、どこでも鉄製の馬鋤で均されていた。ペルミ付近でも至る所でそのような状況であった。しかしエカチェリブルグでは—そこには5月1日に着いたが—まだ耕作が始まっていなかった。チュメニとカムィシロフの南方は、土地ははるかに農業に適しており、樹木にとっても豊穡の地である。」(285) 彼は流刑中も帰国後も自ら農耕を実践しており、さらに本格的な農業論『我が領地の記録』を著している。彼の農業への関心の強さは、帰還日記のこのような観察記録からも証明される。

ウラル越えで二つの貴重な体験をしている。一つはピシマを過ぎた4月28日の記述に示されている。「この駅では日曜日等の労働禁止に関する勅令を伝える急使が出迎えられた。」(284) これはパーヴェル一世が1797年4月に発布した週三日賦役令、日曜労働禁止令を伝える急使だったのだろう<sup>14)</sup>。もう一つは、ウラル山脈を越え、既にペルミに近いクングルでの記述にある。「茶を堪能した後、サバルカを10時ごろ出立してクングルに向かい、5時に到着。市長…私の著書のコピー。」(286) 『ペテルブルグからモスクワへの旅』は刊行と同時に先を競って書き写され、多数の手書き本が出回っていたが<sup>15)</sup>、ラジーシチェフはここでそうした手書き本の一冊を目にしたものと考えられる。この記述には伏せ字が用いられており、日記においてさえ自著の記載に極めて慎重だったことを窺わせる。

### (3)

5月10日に到着したペルミはカマ川とチュソヴァヤ川の合流点に位置し、前年の1796年に県庁所在地になったばかりであった。「ペルミではI・D・宅にすこぶる快適に過ごし……ライシェフまでカマ川を航行することに同意する。」(287) ラジーシチェフはこのように記している。I・D・とはペルミ県議会の議長I・D・プリアニニコフであるが、彼はかつては元老院勤務時代の同僚で、後には法典編纂委員会で委員を勤めており、ラジーシチェフにとっては殊更縁の深い人物であった<sup>16)</sup>。ペルミから航路を採るに至った経緯と、一行が利用した船舶について、息子パーヴェルは次のように詳しく伝えている。「ペルミからはプリアニニコフの忠告に従って、ラジー

シチェフは平底貨物船(барка)でカマ川を下った。棒鉄(3500ブード)を積載したこの平底貨物船すなわち平底荷船(коломенка)は、鉄を積載した50隻からなる大船団の旗艦だった。……旗艦の貨物船には3室があり、通常は管理人が使っていたが、この時は自分の部屋をすべてラジーシチェフの家族に譲っていた。<sup>17)</sup> 船団には武装した警備員6人が配置され、盗賊に備えていた。二つの大河の航行に際して、一行は破格の待遇を受けたわけである。

16日から始まったカマ川下りは快適だったようである。船室で落ち着いて執筆したのであろうか、自然観察も以前よりゆったりした記述に変化している。次は5月18日の全文である。「微風の中を航行する。兩岸に森林が多いが、耕地は整備されている。進むにつれて緑が現れ始める。この日初めてドゥープ林を目にする。ステップは見られず、耕地が整備されていることから、この地で人々が既に古くから住んでいたと考えねばならない。」(287) 上陸して散策するという、船旅に固有の楽しみもあった。翌19日の記述。「早朝ボートでサラブルへ行く。遠縁と出会う。」(287) エラブガを通過した21日には高名な高山に登り、悪魔が建てたという不思議な建物について、若いガイドから説明を受けている。一方で、数値を付した詳細な記録は航行中も健在である。たとえば労働者への賃金について、5月27日のカザンで次のように記している。「人夫への賃金はペルミからライシェフまでは10ルーブリ、カザンからは14ルーブリ。筏夫には15ルーブリ。チュソヴァヤからリュビンスクまでの渡し舟に33ルーブリ。同じ場所で水先人へは50から60ルーブリ。船曳人夫には26から28ルーブリ。」(291) 注目すべきは、河川労働者の賃金が職種毎かつ地域毎に細かく記載されていることである。

カザンで知事や市長の邸宅に一週間余り滞在した後、6月4日からヴォルガ川遡航が始まった。それは流れに抗して上流に進む航法であり、多くの場合帆の利用も不可能であった。息子パーヴェルは次のように記している。「順風時にはヴォルガを遡航させるために、巨大な箆帆付きのマストを貨物船に掲げる。しかし通常は貨物船は曳綱で曳航される。」<sup>18)</sup> レーピンの名画「ヴォルガの船曳人夫」の完成は1873年のことで、やや時代が異なるが、ラジーシチェフの一行が乗っていた船は、この名画の遠景に描かれた巨船とほぼ同じものであったと想定される。遡航には様々な固有の用具が使われていたが、日記にはそうした用具を用いた困難な曳航の様子が繰り返し綴られている。6月10日の記述。「ヴォルガでは曳船錨で移動し、曳綱や棹で進む。」(294) 14日の記述。「終日で約15ヴェルスタを移動。支流や浅瀬を曳船錨で進んだから

である。接岸できず、川中に投錨し宿泊。」(296) 次は翌15日の午前中の様子。チェボクサリを通過後の描写である。「錨を上げて曳船錨で岸まで船を曳航、次に曳船人夫の昼食時まで曳綱引き。岸には多くのチュヴァシ人がクルミ、ルバーシカ、ズボン、巻き靴下、樹皮製の靴を売っている。」(296)

このような体験を重ねながら、ニジニ・ノヴゴロドに24日に到着し、船旅を終えた。ここで二週間ほど逗留し、知事や司令官の家に宿泊した。ここからモスクワまでは数日間の陸路であったが、相変わらず地名と走行距離が丹念に記され、各地域の状況が簡潔に描かれている。出立当日7月6日の記述。「ニジニを朝9時に出発。馬を交替。ドスキンまで25ヴェルスタ、レシコフまで21ヴェルスタ、ボゴロックまで40ヴェルスタ。」(303) ムロムで弟モイセイと会い、ヴラディーミルを過ぎたアンドレエフスコエ村でヴォロンツォーフ伯爵と会見した。そして最終日11日の記述。「そこを夜明けに出発。モスクワまで24ヴェルスタを急ぎ進み、午前の礼拝に到着。……町を散策。その後モスクワに滞在。」(304) 日記はこの文章で唐突に終わっている。

#### (4)

観察記録が主体のこの帰還日記は事象の客観描写が大抵であるが、時として私的な体験が混入する場合もあった。ラジーシチェフは概して飲酒に批判的であったが、自身は楽しむこともあったのだろう、航行中に次のような記述がある。6月9日ウスロン付近での体験である。「着岸してから、酒を買いにやらせる。水入りの酒で、酒売り人がごまかしたのである。」(294) また自らに災難を招いた失敗談も挿入されている。リュスコフ付近での6月22日の記述。「ビリヤード居酒屋で冷えた蜜酒を十分飲む。その結果は悲惨だった。…冷えた蜜酒でひどく気分が悪くなり、船で嘔吐し、体力が完全に失われ、船に運ばれ床に寝かされた。下痢と、足に痛みを伴う激しい痙攣。これに役立ったのはホフマン点滴剤による牛乳温湿布であった。」(301-302)

私事に関連して特別な感慨を催されるのは、妻エリザヴェータの発病と死に関する記述である。3月10日に「妻、病みつく」(278)とあり、続けて「E. V. (=エリザヴェータ・ヴァシリエヴナ)の病気のために11日は留まる」と記される。次の記述は15日のタラにおいて、「医者を拒否」、「懺悔をする」(281)とのみ記されている。タラには27日まで滞在し、さらに旅を強行した。妻はトボリスクで死亡した。「7日、死亡。9日、埋葬。」トボリスクは往路で妻と再会した思い出の地であった。その時を回顧しつつ、次のように感慨を記す。「ああ、私の最初のトボリスク滞在はなんと快かったことか。悲

哀の中で最愛の者たちと出会いもし、はたまた永久に別れもした。……この町は私の心を永久に引きつけるだろう。」(283)

先妻との間に生まれた息子パーヴェルは、二人の関係を「相互への尊敬と信頼によって結ばれていた夫婦」と説明しているが、同時に彼は、エリザヴェータの死亡に触れつつ、「最初の妻の死の時ほどには悲しまなかった」<sup>19)</sup>とも記している。ラジーシチェフはエリザヴェータの死を表立って悼むことに躊躇したのであろう。なぜならば二人の結婚は正式に認められたものではなかったからである。しかし何よりも、彼には悲しみに浸っている余裕など無かったのであろう。日記の中で彼は彼女の死についてはその後一切触れておらず、日記の内容はむしろ明るみを増してさえる。しかし彼女への追慕の念は消えたわけではなかった。それはネムツォヴォでのヴォロンツォーフ伯爵あての手紙(7月24日付)に切々と表現されているし、未完の詩物語『ボーヴァ』にも表出している。

## 2

### (1)

旅の全体像が把握できたので、次に自然科学者としての側面を日記より抽出してみよう。通過する各地域の自然状況がほぼ毎日記録されているが、ここでは対象を鉱物と植物に分けて紹介し、最後に医療活動に簡単に触れてみたい。

鉱物に関しては陸路でも航路でも詳しい観察記録が残されている。陸路の例としては3月6日トムスク付近での記述がある。「小高い川岸で粘板岩、花崗岩が産出され、白石英が豊富に採れる。土は黒く、そこから硫酸塩と明礬が採れる。その近くに白カオリンがあり、それから食器を作るが、粗悪である。」(274)航行中には船上から岸辺を観察した。6月9日ヴォルガ川での描写。「出発するとすぐに帆を挙げ、微風の中を進む。まもなく岸辺は峻厳となり、最初は石灰、後に密度の高い板岩となる。」(294)それから5日後の14日の記述。「カマ川の河口から岸辺は石灰岩で、所々アラバスターがある。スンドィリ付近は赤粘土と砂。スンドィリの後方には…泥板岩が見える。チェボクサリ付近には石灰岩層と石化粘土が見える。」(296)再び陸路に戻り、旅の終了間近になっても、土質や地形に関する観察が続けられる。モスクワに近いムロム周辺での7月7日の記述。「土は粘土質である。下りつつ、各地で森と耕地が交互にあり、どこでも村が密集している。」(303)。さらに翌日の記録。「ムロムより土は砂質であり、森林は無い。スドグダ近くとスドグダ以降は森である。新村まで24ヴェルスタで、

砂質の道が疎林と草原上に続く。」(304)

帰路でのこのような自然観察は唐突に始められたものではない。それは地誌や鉱物学に関する往路での関心の深化であり、イリムスクでの研究成果を踏襲していた。ラジーシチェフは流刑をシベリア研究の格好の機会と捉えていたのである。彼はしばしば専門書の送付をヴォロンツォーフ伯に手紙で依頼しているが、これらの書名を列挙するだけでも、彼が当時のヨーロッパの先端研究に触れていたことが理解される。それらの中には、L・レセップス著『カムチャッカからシベリア南部へのレセップスの旅(フランス語)』(1790年)、G・ステラー著『カムチャッカ誌』(1774年)、『1733-1743年シベリア旅行記』(1767年フランス語版)、I・F・ゲルマン著『ウラル鉱山の鉱物学的記述の試み(ドイツ語)』(1789年)、I・M・レノヴァンツ『ロシア領アルタイ山脈に関する鉱物学、地理学、及びその他の雑多な記述(ドイツ語)』(1789年)、そしてアカデミー会員I・A・ギュルデンシテット著『ロシアとカフカス山脈旅行(ドイツ語)』(1787年)などが含まれている。これらの書物を利用しつつ、シベリア時代に彼は自分自身で鉱石を求めて探検し、科学実験を試みた。帰路での自然観察はこうした積年の努力の延長線上にあった。

植物に関しても同じことがあてはまる。植物関連の専門書についてみれば、J・グメリン著『シベリアの植物(ラテン語)』(1747-1769年)について手紙に記しているし、植物学者J・ファルクの著書の送付を依頼している<sup>20)</sup>。イリムスクでは植物採集に熱中し、帰還日記には植物観察が終始綿密に記されている。大雪原の走行中にも松、白樺、樅など、目にした植物をほぼ毎日記載し、植物の分布状況を記録として残している。たとえば2月28日の記述。「クスクンからバトイまで24ヴェルスタ。道は松、トウヒ、白樺などの小森林帯を進み、次に低地に入る。」(271)3月7日オビ川周辺の観察。「オビ川への道は松林を進む。オビ河岸のタシェラまで21ヴェルスタ。オビ川は島が多く、対岸は低地だが、川を渡ると道は広大な草地を進み、ドゥープ林に至る。」(275)さらにN. B. (注意せよ)の記号が付せられて、次のように続く。「トムスク周辺の土地には施肥ができない。耕地にカモジグサという草だけが生育するからである。タシェラより下方の移住者はあらゆる方法を試みたが、成功しなかった。」(276)植物観察は船上でも続けられる。松の植生については特に関心を寄せ、ヴォルガ川航行中の6月23日に次のように記している。「次に草地を通過する。そこでは山際に松林がある。それは水がここまで上昇しない証拠である。」(302)

最後に医療活動について触れておこう。イリムスクで

は住民に治療を施して感謝されたが、医療行為は旅行中にも続けられた。出発後間もない2月23日のブラーツクでの体験である。「ブラーツクではイリヤ司祭宅に宿泊した。私は彼の熱病を治療した。それはいわば彼に付きまとい、平穏を与えなかった。彼の病気は神経の異常活動であった。原因は分からなかった。感謝して彼は我々に御馳走し、修繕をするよう命じたが、馬車賃の徴収は命じなかった。」(269)人間だけではなく、家畜の病気についても医学的な考察を試みている。ウビンスクとカンスクを越えた3月10日の記述である。「タルタス川に沿ってたくさんの家畜、特に羊を飼育する。二年間疫病は無かったが、それ以前には馬は疫病になり、雌牛は……舌が罹患し、羊は天然痘……になり、鶏さえ死亡し、人も馬から感染した。」(279)。

このようにして、難儀を極めた旅行中においてさえも、彼は自然科学者としての姿勢を堅持したのである。

## (2)

自然科学者としてのラジーシチェフの特徴は、ウラル山脈に関する考察に最も明白に表れている。彼は地球の形成過程に特に深い興味を懐いていた。1794年11月の手紙では、ツングスカ周辺の自然に触れた感動を述べた後で、次のように記している。「地球の形成と変遷に関してはすべての可能性の究明から、我々はほど遠く離れているように思われます。」(467)彼は自分なりの知識と推理で「地球の形成と変遷」を究明する努力を続けていたようである。その際に特に深い関心を払ったのがウラル山脈であった。「ウラル山脈はシベリアをロシアと分断しつつ、あらゆる点でシベリアを特別なものとしている。」(379)1791年5月29日に流刑途上でこのように手紙に記し、さらにその直後の5月30日付手紙で、「多くの点でこの人々はまる一世紀大ロシア人から引き離されています」(380)と、ウラル山脈以東の住民についての感想を述べている。ウラル山脈への関心は6月6日付けの手紙にも表現されている。そこでは、トボリスク周辺には鉄分を含む清浄な泉があるが、その泉は鉄分を豊かに含有するウラル山脈に発しているはずだ、という仮説が提起されている。

帰還日記にはウラル山脈に関する彼の関心が集約的に示されている。ウラル越えを終えてペルミに一週間ほど滞在した時、彼はウラルの地質や地形について詳述しているが、それは従前からの強い問題意識と結びついて、一種の研究報告の性格を帯びている。1797年4月30日付の記述である。「チュメニからプシマまではオビ川までのすべての地域と同様、平坦であるが、プシマを越えると状況が異なる。既に道が上昇し始める。エカチェリンブルグは凹地に位置するが、この町の地表はプシ

マの地表よりすではるか高地にある。陸路の距離は約300ヴェルスタだが、川沿いの距離はおそらく500ヴェルスタに達する。これに付言すべきは、ビリムバイハそのものまでの上昇は大きくはなく、一方ここですでにチュソヴァヤ川が流れていることである。この川はカマ川に流入する。すなわち、シベリアの水とロシアの水を分ける山脈の背後に、流入しているのである。地震がこの土地を他の土地よりも激しく変形させ、ウラル山脈の頂をこの地で下降させたと、考えねばならない。この説明は次の事実によってさらに確実なものとなる。すなわち、コスリナヤからエカチェリンブルグまでの駅間では一部で、一方エカチェリンブルグからレシヨトまでの駅間では全地域で、最大級の石英岩が散布しており、ビリンバイハまでは花崗岩が散布しており、そしてエカチェリンブルグそのものは石の多い強固な地盤上にある。」(285)同様の観察記録はさらに続き、次の文章へとつながる。「ウラル山脈の東側はエカチェリンブルグ周辺では平坦であるが、しかしすでにカムィシロフから小山がある。そしてエカチェリンブルグは山上には位置しないが、片岩の地盤上にある。レシヨトまで道は石が多く、石英や大理石の巨岩が多いが、その後はビリムバイハまでも花崗岩である。」(286)これらの文章はウラル山脈を通過する際の観察記録であるが、そこには、自分なりの主体的な立場から「地球の形成と変遷」についての仮説を構築しようとする試みが示されている。

## 3

### (1)

次に社会科学者としての立場からの観察や論評に目を転じよう。初めにシベリアの農民について、次にカマ川とヴォルガ川の河川労働者について、そして最後に鉱工業や商業についての記述を検討してみたい。働く人々に対するラジーシチェフの見解には、異なる二つの意識が反映されているように思われる。一つは社会的弱者の立場に身を置いて不平等や不正を摘発する社会批評家としての意識であり、もう一つは国民生活全体の向上を希求する進歩的行政者としての意識である。

オビ川付近での3月7日の記述はシベリア住民の労働状況を伝えており、既に工場労働が定着していたことを明らかにしている。「エルシヨヴァヤでは近隣の三村落が共同して猟を行う。…獣産物はリス、クマ、そして殊に大量のシカである。しかし農民は貧困化している。稼業は悪く、皆が工場へ行って働く。」(275)工場送りされるこれらの人々、いわゆる工場登録農民は、厳しい課税を強要され、極貧を余儀なくされている。「チャウスキーではコリヴァノ・ヴォスクレセンスキー工場に登

録された農民が住んでいる。工場では彼らは人頭税以外に一人当たり2ルーブル70カペイカ分の労働をなしており、本人は望まなくても、12ルーブルから15ルーブルを支払う。最も勤勉な者でもどうにかそれを達成するのに10週間はかかる。」(275-276)

工場登録農民と並んでラジーシチェフの関心を強く引いたのは、移住者(посельщик)の生活状況であった。移住者と先住者(старожил)との対比はすでに往路で行っており、たとえばタラ付近で1791年8月に、次のような記述を残している。「ポクロフスキーには先住者と移住者がいる。先住者は豊かに暮らし、移住者は多くが貧しい。税の滞納故に酒造工場に派遣される。そこでは徒刑囚も働いている。たくさん密造。移住者は多くが高齢で、老いぼれて貧しい。」(262) 帰路においても両者は対比して観察され、たとえば1797年2月26日の記述は次のようである。「ここには多くの移住者がいたが、死亡したり、滞納金の故に今では工場に送られている。」(270) トムスク近くの3月5日の記述も同様の内容である。「トルンタエフまで22ヴェルスタ。ここには先住者と移住者がいる。……移住者の中にはぼろ服を纏った多数の孤児がいる。」(274) さらに同月10日の記述へと続く。「アントシキノエには多くの貧しい高齢者がいる。多くの地域ですでに死亡した。移住者も住むカインスクのこちら側ではさらに貧しいことが明白である。」(278) このように、移住者の困窮が繰り返し強調されていることが注目される。歴史を紐解けば、地主による農奴のシベリアへの強制移住が1760年に合法化され、さらに農奴の強制徒刑が1765年に合法化されている。ラジーシチェフの記述はこうした方策の悲惨な結果を証明するものだろう<sup>21)</sup>。

社会的弱者に同情を示すだけでなく、彼が怠惰な村民に批判の目を向けていることにも、留意しなければならない。出発当日に夕食を供された家族について次のように評している。「エゴル・ルキチ、彼の息子のフォーマ、及び三人の娘の生活は貧しい。怠惰がその原因であるらしい。」(267) そして翌日の2月21日にも住民の怠惰が批判の標的にされている。「これらの冬営者は以前よりも貧しく暮らしている。時には酒を売る。近くにツングース族がやって来るのである。彼らは時としてレンスク連水陸路でイリムスクを通過する。……怠惰、怠慢、及びその他の類似物がどれほどの貧困をもたらすかが、ここから明らかである。」(268) シベリア住民の怠惰と飲酒癖は他の個所でもしばしば非難されているが、その一方で、有効性を伴わない不合理な労働が摘発されている。3月7日トムスク付近での記述である。「タシェラに近付いて、3人の移住者と会う。彼らは道を修理し

ていたが、見せかけだけのものだった。これは他の地域でも行われている。」(275) この指摘からは、人間の労働は合理的で効率的であるべきだとの観点が察知され、ラジーシチェフの進歩的行政者としての側面が窺える。

## (2)

河川労働に従事する人々に対しても、社会批評家としての視線と進歩的な行政者としての視線が、相並んで当てられる。6月13日のチェボクサリでの記述は弱者への同情に満ちており、『ペテルブルグからモスクワへの旅』の世界を髣髴させる。「病気で能力が劣る人夫を多数目にする。彼らには身分証明書が与えられず、幾多の迫害が加えられる。一人の人夫がしばらく離れていたために、ひどく鞭打ちされるのを、ウスロンで目撃した。」(296) 一方で、河川労働者の能力不足や意欲の欠如に対しては厳しい批判を呈しており、そこには行政者としての心情が反映しているように思われる。6月16日の日記には、技術と意欲に欠ける労働者が、次のように皮肉混じりに痛罵されている。「N. B. チュソヴァヤ川では船は岩や岸に当たって壊れ、カマ川では水中の岸や、氾濫で運ばれた木材に当たって壊れる。ヴォルガ川ではほとんどいつも下痢によって浅瀬に乗るか、岸に当たるか、あるいは他の船に追突するかであり、常に操縦ミスが原因である。ヴォルガの人夫は常に順風、すなわち強過ぎぬ程よい風を希望する。彼らの無能と劣悪な艀装が不幸をもたらすからである。」(297) ここでは「下痢(понос)」という単語が不自然な感を与えるが、もし誤植でなければ、過度の飲酒等のふしだらな生活に起因する体調不良が示唆されているのだろう。

河川労働者、中でも船曳人夫は19世紀後半のロシア絵画にしばしば登場し、1873年に完成したレーピンの作品がとりわけ有名である。しかし同じテーマはもっと早くから登場していた。ヴェレシチャーギンは既に1866年に「船曳人夫たち」を描いたし、サヴァーソフは1871年に「ユリエフツのヴォルガ川」で女性船曳人夫を主題に描いている。これらの絵はいずれも労働者の過酷な労働に焦点を合わせており、鑑賞者の視線は自ずと彼らの労苦に注がれる。やや意外なことだが、ラジーシチェフの日記には彼らの労働状況がほとんど記されていない。旗艦に乗っていた彼の目には船曳人夫の苦役は映らなかったのかもしれない。

## (3)

行政者としての視線は、農業や河川労働とは異なる新しい産業、すなわち手工業や商業に対しても向けられる。シベリア奥地の工場についての叙述は、そこが登録農民の仕事場だったことにも起因して、否定的な響きを伴ったが、4月27日付のチュメニの手工業についての記述は、

肯定的な響きを放っている。「町のこちら側はすべて製革所で、製革所がとても多い。ロシアレザーはシベリアのどこよりも安い。一般的にチュメニとその管区には各種の手工業がたくさんあり、村全体が必ず一つの手工業を有している。驚きに値しない。シベリアで最も重要な都市の一つなのだから。」(284) ウラルを越えるとラジーシチェフの前に様々な生産活動が展開されていた。5月20日のカマ川での観察である。「サラプルの近くに波止場がある。そこでは樅材を船材やマスト用として、アストラハンに向けて平底荷船に積載している。」(288) 不可思議な仕事に携わる人々についても記述している。5月27日付の日記。「ライシエフの下方4ヴェルスタの所には、沈んだ鉄を引き上げる作業を生業としている農民が住んでいる。ゴリーツィンの話によれば、カマ川の河口には、まる1時間も水中に潜る百姓がいる。」(291-292) ヴォルガ河岸では石灰の生産も盛んになっている。6月6日の記述。「ナルシキンの村々を通過し、彼に所属する村で宿泊する。向かい側では石灰を焼いている。15に及ぶ窯がある。」(292) 遡航が進むにつれて、眼前の産業は多様化していった。ニジニ・ノヴゴロド近くのカジカ村では大型平底帆船(расшива)がたくさん売られているし、「バゾヴォドノエ村では、住民が針金を作っている。」(302) 生産活動に関する記録はモスクワ到着直前まで続く。到着前日7月10日の日記である。「ミクリノで絹織物工場を見る。織機15台、10,000ルーブリの収入。」(304) これらの生産活動について、ラジーシチェフはその発展を希求しつつ記述しているように思われる。そこからは彼の行政者としての視点を看取することができよう。

#### 4

##### (1)

航行中のラジーシチェフには自然科学者とも社会科学者とも異なる別の二様の姿があった。一つは自然観照者としての姿であり、もう一つは義賊に共感するロマンチストとしての姿である。

ヴォルガ川を航行中、ちょうど画家が絵画で表現するように、彼は文章によって自然美を表現しようと試みている。6月7日付の次の文章がその代表例である。息子パーヴェルは「カザンと真向かいのヴォルガ川右岸の大村ウスロンで二日間滞在した」<sup>22)</sup>と記しているが、その時の体験であろう。「ウスロンで夕刻前に高い山に登る。そこからの眺めは絶景。…夕方に川辺に出て、年少も年長もすべて山に入る。山は村落の上であり、ハシバミに鬱蒼と覆われている。厳しい登りだった。森の深さも、蚊やブヨも我々の登攀を妨げなかった。山頂に昇りつめ

ると壮観が開けていた。山は後方で下り勾配となり、低地に大村が鎮座している。周囲には耕地が一面に広がり、巨大な絨毯の観を呈している。それは凹凸のある表面上を、坂や丘や沢となって、波状に広がっている。そのピロード状の緑の葉はすでに大きく育ち、風が吹くと表面に水面の波動のような振動が生じる。さほど遠くないところで、視界はドゥープの樹林によって妨げられた。川の方に目を向けると、左側にヴォルガの高い河岸が見えた。屈曲する河岸からは岬が次々に突き出ており、それはついには淡い紺碧に覆われて、そこですべての物体が一点に閉じられていた。ヴォルガ川の真向いには深い森に覆われた低い岸辺が広がり、そこには小さな村々が点在している。ヴォルガの流れはまだ低木帯まで溢れていた。沿岸の砂地ではたくさんの漁師が群れをなしてひしめき、漁網を引いていた。右側にはカザンカの諸支流が蛇行しており、その近くの丘の上では、丸々と茂った木々の頂から、ジラントフ修道院の聖堂の円屋根が聳えている。その奥にカザンが見えた。砲門を備えた白い城壁が一番前方にある。城砦の近くでは前方に建物が広がっていた。……はるか後方には右側にエルサレムの大主教の石造家屋と教会が、まるで緑の幕の背後の白い点のように見えていた。カザンカ川とヴォルガ川には小舟が点在しており、遠くの船はまるで動く黒点のようであった。」(292-293)

自然に対するラジーシチェフの感応に深い関心を寄せたタタリンツェフは、彼の自然表現を次のように高く評価している。「18世紀の全散文作品の中でこの風景描写ほど鮮やかで表現力豊かなものは他にない。」<sup>23)</sup> 確かにこの風景描写にはヴォルガの豊かな景観が、漁師や小船も含めて、見事に描かれている。遠景には修道院や城砦が収められ、近景には風に波立つ麦畑も瑞々しく表現されている。19世紀になるとロシアでは多くの画家がヴォルガの景観美を描いて、名画を残している。N・チェルネツォフ「ニジニ・ノヴゴロド風景」(1837)、G・チェルネツォフ「ヴォルガ」(1839)、F・ワシリエフ「ヴォルガの眺め」(1870)、そしてラジーシチェフの孫A・ボゴリューボフ「ニジニ・ノヴゴロド風景」(1878)などがその代表である<sup>24)</sup>。ヴォルガ川境界の美観にあってラジーシチェフは深い感興を覚え、これらの画家たちに先駆けて、この魅惑的な文章表現に至ったのであろう。

しかし一つ留意しなければならないことは、彼が眼前の原自然にいつも満足していたわけではないことである。彼は人間の力が関与しない自然を見て、空虚感を覚えることがあった。このことはコジモデミヤンスク付近に上陸した際に記した6月18日付の記述から明らかにされる。「夕食前に我々は高い山に登る。そこからの景色はすば



らしい。蛇行するヴォルガが約20ヴェルスタ先に見える。対岸に見えるは森ばかりで、心が締め付けられる。無限に広がる空間に村一つ見えない。一番奥にあたかも火山の噴火のように煙がまっすぐに昇っている。森に沿って所々小さい湖が点在する。ヴォルガ左岸の小高い山に村の端が見え、その後方の傾斜面には広大な畑が見える。畑に風が吹き、さざ波に似た振動をもたらしている。あちこちにかなり大きな村が見える。」(298) 人気のない無限の空間を見て、彼は憂愁を覚えたのである。自然を開発の対象として捉える行政者としての心情を、ここに見て取ることができよう。

最後に、ある修道院を訪れた際に彼が記した感想を紹介しておこう。宗教的建造物に対する彼の美的評価の一面を、そこから探ることができよう。息子パーヴェルは「当時定期市で有名だった町マカリエフの対岸にあるリュスコヴォ村でも滞在した」<sup>25)</sup>と記しているが、ラジーシチェフはこの時の体験を次のように伝えている。「貨物船に戻る途上私は小舟に乗り、マカリエフへ行く。リュスコヴォ対岸のヴォルガ河岸では、マカリエフ定期市の際に馬市が開かれ、はたご屋や居酒屋が立つ。上陸後、聖体礼儀をすませて、修道院を訪れた。それで教会を観察することができた。鉄製の聖門は古い稚拙な寓意画や歴史画で装飾されており、一部は色あせしている。大聖堂は五つの円屋根を持ち、屋根の下に絵画がある。内部は4本の柱で支えられており、絵が描かれている。イコノスタスは金製で新しく、絵画も古くなく、標準以上である。柱の周囲には古いイコンが4体あり、正面には3体ある。……絵画は稚拙だが、彫刻は並である。天使は破損しているが、様々な金で上手にメッキされている。北の扉には聖像庫があり、……その中にキリスト像がある。頭に荊冠と後光を被っており、右手は焦げ、体は紗の切れ端で覆われている。今日では聖堂内にそのような彫像があることに耐えることができないだろう。それほどに下品である。」(301) 以前彼は『友人への手紙』の中で、ピョートル大帝の騎馬像を一個の芸術作品として論評したが、それと同様にこの記述も、聖堂の内観を純粹な美的観点から評価している。そこには信仰者としての視点は皆無であり、ひたすら近代的な批評家としての立場が貫かれている。

## (2)

船旅で景観と共にラジーシチェフの関心を引き付けたのは盗賊だった。盗賊に関する記述は陸路でも散見されるが、カマ川下りが終盤に迫るにつれて俄然頻繁になる。ヴォルガ川との合流点に近いエラブカ付近での体験を、5月21日に次のように記している。「ボートを買って来た会計が、盗賊がいると言う。特に注目すべきこと

に、曳船人夫が彼らと昵懇であり、顔見知りには彼らに大目に見られている。」「NB スヴィノゴリエの居酒屋で盗賊を見た。停泊地で彼らは恐れられており、私は朝明けまで空しくも寝ずの番をした。」「NB 身分証明書を所持するヴァトカ出身の盗賊は出納局長から容易にそれを手に入れる。彼らを知る水夫たちが、ヴァトカ県のオルロフ町に住む泥棒について物語った。」(289-290) 23日にはついに自分自身が盗賊の住処に遭遇する。「日の出に出帆。しかし大村アマラを過ぎて間もなく、高い砂岩の岸辺に投錨する。そこでは20艘以上の平底荷船が接岸していた。この岸辺の中ほどの空き地に古い強盗の巣窟を発見した。それは洞窟にあり、中央には自然石で竈が作られていた。」(290) この日彼は懇意にしていた商船団長ゴリーツィンのもとを訪ね、一人の名うての盗賊についての逸話を耳にする。「私は商船団長を訪れた。強盗イヴァン・ファジェーエフについての話を聞く。彼は自領の農民に無慈悲な貴族を懲らす一方で、良き貴族は容赦した。養女を持つ貴族にとって彼は脅威だった。百姓家で彼は見つけられたが、500ルーブルを与えて家を焼かせ、トロイカで逃亡した。危うく捕縛されそうになったが、道に紙幣を投げ始め、救われた。40000ルーブル近くの金を所持していた。これはヤロスラーヴリに近いゴリーツィン家に起こったことである。」(290)

「強盗イヴァン・ファジェーエフ」については、息子パーヴェルが詳述しており、父親の記述内容を明らかにしている。「強盗の間で名を馳せていたのは彼らの首領イヴァン・ファデイチで、彼は堂務者の出で、兵役に出された逃亡兵である。彼は誰も殺害せず、富裕な通行者、特に商人から巻き上げるだけだった。金持ちの某商人が大金を持って来ると知ると、彼は適当な場所で彼を待ち伏せし、停止させ、有り金すべての供与を要求した。いつも金の一部は通行料として通行者に与え、何ら危害を加えずに彼を釈放した。貧しい通行者には援助することもあった。」パーヴェルは盗賊の名前をファデイチと記している。ラジーシチェフは「養女を持つ貴族にとって彼は脅威だった」と述べているが、この表現については、パーヴェルの次の記述が参考になる。「ある後見人が自分の養女を虐待した。彼は後見人のところに現れ、彼を激烈に叱責し、もし彼が改心しなければ、目に物を見せ、哀れな孤児の復讐を遂げることを、約束した。」またファジェーエフの逃亡場面に関して、パーヴェルは次のように記述し、詳細を明らかにしている。「ついに郡警察署長はイヴァン・ファデイチが村の百姓家に泊まっていることを嗅ぎつけ、…強盗たちが潜む小屋をコサック兵に包囲させた。逃亡が不可能と知って、イヴァン・ファデイチは即座に決定的な手段を講じた。彼は小屋の

主人を呼び寄せて言った。『お前に500ルーブルをやる。小屋を燃やせ。』当時500ルーブルは百姓にとって今日の2000ルーブル以上であり、彼の屋敷は100ルーブルの価値もなかった。たちまち屋敷のすべてと小屋が内側から藁の山で包まれた。点火され、屋敷全体が赤々と燃え始めた。人々は道を開け、四散した。突然門が開き、トロイカ二台がまばらになった群衆を通り抜け、稲妻の如く村から疾走した。…イヴァン・ファデイチは5ルーブル紙幣やら10ルーブル紙幣やらを投げつけた。……その間に二台のトロイカは遠く離れ、すでに追跡は不可能となった。こうしてこの時もイヴァン・ファデイチは追跡を逃れた。<sup>26)</sup> ファージェエフはいわゆる義賊であり、ラジーシチェフはこの人物像に強く惹かれたらしく、再三このエピソードに触れている。

盗賊への関心はヴォルガ下りになっても続く。特にシルク湾(Шеловый затон)の名前の由来に関する考察が興味深い。チェボクサリからニジニ・ノヴゴロドに向かう6月17日の記述である。「NB. シルク湾では略奪が多発する。シルクの呼称は、この入江に唯一つある村落の住民が、盗賊と同様に略奪で全員が富んでおり、絹の脛当てをしていたことに起因する。」(298)そして21日には、シルク湾の名称の由来について別の見解が、次のように述べられている。「さらに進んで、低い左岸側で、有名なシルク湾が始まるが、多分多くの商品が沈められたことも、呼称の理由だったのだろう。」(300) 帰還日記には「注意せよ」の意味のラテン語表記 N. B. が多用されている。このことは、この日記に後の創作活動に備える意図があったことを、示しているのかもしれない<sup>27)</sup>。いずれにしても、盗賊に関する記述は躍動しており、ロマンチストとしての彼の一面を露わにしている。

### (3)

シベリア流刑はラジーシチェフに新たな世界を提供すると同時に、新たな自己の発見へと導いた。シベリアという土地が探検者としての彼を新たな領域に引き入れたのである。シベリアに対する熱い思いは、往路のトボリスクで1791年春に書いた手紙に示されている。「私の目の前の壁にはロシアの総地図が掲げられておりますが、シベリアはそこでほぼ4分の3を占めているのです。」(356) シベリアでの生活を重ねるにつれて、彼はこの広大な地域に無限の可能性を見出し、その可能性の実現に自ら係わる夢を懐くに至った。同年の夏に次のように記している。「このシベリアはその資源において何と豊かな地域なのだろう。…抑えがたい力、力強い動機がこの地方の停滞した人々に好ましい事業意欲を授ける時には、世界は再び目にするだろう、エルマークの同志の子孫たちが、通行不能とみなされている北氷洋を渡る通路の探

索を始め、成功することを。それによりシベリアをヨーロッパと直結せしめ、さらにそれによりこの地方の巨大な農業を今日の休眠状態から救出する姿を。と言うのは、オビ川河口やロシア人が「カル湖」と呼ぶ入江、そしてヴァイガチ海峡について私が入手した情報によれば、これらの場所では結氷しない短縮航路を開くことが容易なのです。もし私がこの県で日々を過ごさねばならないとすれば、私はこの航路の探索に進んで援助を申し出るでしょう。」(387-389) ラジーシチェフはシベリアとヨーロッパを結ぶ航路として北氷洋を利用し、シベリアの農業の発展を促したいと、本心から願っていたのである。意欲的な行政者もしくは実業家としての彼の一面が、この手紙には見事に表現されている。そして同じ人物像は様々な姿で帰還日記に登場している。

最後の休息地ニジニ・ノヴゴロドで彼は短いながらも意味深長な文章を綴っている。「ペテロ・パヴロ祭。大聖堂訪問。ミーニンの霊廟。私はまるで珍鳥のよう。夜大雷鳴。町を歩き回る。」(303) ここで特に興味をそえられるのは、「珍鳥(редкая птица)」という表現である。奇しくもシベリアから舞い戻って来た一羽の鳥、とでも言った意味合いであろうか。今浦島の心境と同時に、流刑生活に耐えて長旅を乗り切ったことへの安堵感があったのかもしれない。そこにはある種の解放感も感じられる。旅の終着間近、ヴラディーミルの自邸にラジーシチェフを招聘したヴォロンツォーフ伯は、彼の肖像画を描かせている<sup>28)</sup>。その肖像画は、流刑前の肖像画に溢れ出る初々しい表情こそ消えているが、それに代わって、苦難を乗り越えた人間が持つ冷厳な力強さを示している。この時彼はまだ50歳に達しておらず、作家としても行政者としても、多大な可能性を秘めての帰還であった。

### 註

- 1) Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева (М., -Л., 1952), 303を参照。なお流刑に至る状況、流刑行、及びシベリアでの生活については次の拙稿を参照。「イリムスクへの旅—流刑人ラジーシチェフの最初の日々」(『一橋論叢』第76号第3号、1976年)、「シベリアにおけるラジーシチェフ」(ナウカ『窓』第29号、1979年)、「ラジーシチェフの人間像—ロシアにおける近代的社会批判の開始—」(『芸術世界』東京工芸大学紀要16、2010年)。
- 2) Академия Наук СССР, Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями (М., -Л., 1959), 85.
- 3)カッコ内の数字は А. Н. Радищев, Полное Собрание Сочинений 1-3 (М., -Л., 1938-1952), 3の頁数を示す。以下同じ。
- 4) 同533-534頁を参照。
- 5) 同514頁(1798年1月ヴォロンツォーフ宛て手紙)を参照。
- 6) 二つの日記の相違については、А. Татаринцев, Радищев в Сибири (М., 1977), 223-224頁を参照。
- 7) 桂川甫周著、亀井高孝校訂『北極聞略』(岩波文庫、1993年)、217-218頁。

- 8) 玉井喜著作、小林健祐訳『シベリア隊商紀行』(筑摩書房世界ノンフィクション全集47、1963年)、187頁、250頁を参照。玉井に関しては次の関連書がある。湯郷将和『キサク・タマイの冒険』(新人物往来社、1989年)。なお本稿全般の執筆に際して次の各書籍が参考になった。ジョージ・ケナン著、左近毅訳『シベリアと流刑制度 I, II』(法政大学出版局、1996年)、森永貴子『ロシアの拡大と毛皮交易』(彩流社、2008年)、相田重夫『シベリア流刑史』(いずみ橋書房、2009年)。
- 9) 玉井喜著作、小林健祐訳『シベリア隊商紀行』、218頁、231頁を参照。
- 10) A. Татаринцев, Радищев в Сибири, 43頁を参照。
- 11) A. Татаринцев, Радищев в Сибири, 211-214頁を参照。
- 12) 1791年7月30日の記述。「イシム川沿いは黒土。アチモヴェヤからズジロフスクの前哨まで連水陸路は沼沢地や低地を進む。」(261) なお連水陸路については次を参照。渡辺京二『黒船前夜』(洋泉社、2010年)、34頁。
- 13) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 87.
- 14) 土肥恒之『ロシア社会史の世界』(日本エディタースクール出版部、2010年)、15頁を参照。
- 15) Николлай・Смирнов=Соколинский著、源貴志訳『書物の話』(国書出版社、1994年)、134頁、及び A. Татаринцев, Радищев в Сибири, 95-114頁を参照。
- 16) Прианиникофについては A. Татаринцев, Радищев в Сибири (M., 1977), 69-82を参照。
- 17) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 87.
- 18) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 88.
- 19) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 86.
- 20) これらの研究者については加藤九祚『シベリアに憑かれた人々』(岩波新書、1974年)を参照。
- 21) 『新版 ロシアを知る事典』(平凡社、2004年) 337頁を参照。
- 22) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 88.
- 23) A. Татаринцев, Радищев в Сибири, 240頁。
- 24) これらの絵画に関しては次を参照した。А. Ю. Астахов (сост.), «Русская Живопись» (Белый Город, 2003); «Пейзаж. Русская Живопись» (Белый Город, 2004).
- 25) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 88.
- 26) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 87-88.
- 27) 記号 N. B. の意味に関しては、A. Татаринцев, Радищев в Сибири, 36頁、225-227頁を参照。
- 28) この肖像画は Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева に掲載されている。